

徳永直の会会報

第64号

徳永直の転向問題

会長 高木 陽助

最近世の中が急に慌ただしくなったように感じる。連日、集団的自衛権の行使容認について報道されている。自民党は今国会でこれまでの政府の憲法解釈を変え、集団的自衛権の行使を認める閣議決定をしたらしい。これに連立を組んでいる公明党が難色を示している。集団的自衛権の行使を認めると言うことは、憲法九条を實質的になくしてしまうことになるから、これは憲法改正の大問題である。なのに政府は憲法改正ではなく、解釈の変更によって集団的自衛権の行使を認められるようにしたのである。

歴史は繰り返すというが、私には戦前の軍靴の音が聞こえてくるように思える。W杯に浮かれています間に、安倍政権では様々なことが改悪されようとしている。私の杞憂であればいいのだが。

今年度の総会で、徳永直の作品『冬枯れ』の読書を聞いた。

『冬枯れ』は一九三四年（昭和九年）の十二月「中央公論」に発表された。昭和六年九月満州事変、昭和七年には上海事件が起こり、満州国建国が宣言された。犬養毅が暗殺された五・一五事件が起こり

目次

- ・ 徳永直の転向問題 高木陽助：P1
- ・ 『冬枯れ』を読んで：P2
- ・ 『宮城訪問記』 鈴木之夫：P3
- ・ 二〇一四年度総会報告：P5
- ・ 徳永直文学散歩⑧ P8
- ・ お知らせ・その他・第三十七回「五宗忌」より：P9

ったのもこの年である。昭和八年には国際連盟を脱退し、昭和十一年の二・二六事件へと進み、昭和十二年七月、盧溝橋事件を機に日中戦争へとめり込んで行く。まさにこの時代にかかれた作品である。

テーマは「徳永直の転向問題」。和田崇会員から徳永直の転向問題に関する資料を送っていただいた。判沢弘氏の「労働者作家」、久保田義夫氏の「冬枯れ」、木村一信氏の「徳永直『転向』の行方」である。それに手元の首藤基澄氏「徳永直の転向小説―弱者の視座の意味―」、針生一郎氏「徳永直の再評価のために」を参考にした。

諸氏それぞれに徳永直の「転向問題」に触れているが、ここでは針生一郎氏の指摘を参考に掲げる。「プロレタリア文化運動全体の弾圧による解体後に、徳永は自ら『太陽のない街』の絶版を表明する。これはもう明らかな転向といってもいいんですが、ただそれは妻子を抱えて、なお書いていく自由をファシズムの時代にも失いたくないという、非常に臆病な自己保身から出た絶版声明だった」という。しかし、里村欣三や山田清三郎などのように積極的に国策に役立つ仕事を自ら申し出るようなことはしていない。戦争協力、右

傾化への道を辿らなかつた点を針生一郎氏は評価する。

確かに徳永直が『冬枯れ』から「転向」に傾斜していったことは認められる。しかしその是非を論じる場合、様々な角度から考えなければならぬ。このとき徳永には七月に三女街子が生まれ、六人（義祖母入れて七人）家族の大黒柱である。独身の小林多喜二とちがつて、徳永は何としても家族の生活を守らなくてはならぬ。家族を路頭に迷わせる訳にはいかないのである。

さらに、絶対的貧困の中に育つたという徳永の生育環境や、生得の性格なども考えなければならぬ。もちろん、先に述べた昭和五六年から十年代の時代状況も大きく影響している。これらのことを総合的に考慮しながら「徳永直の転向問題」を論じなければならぬということに、一応落ち着いた。

『冬枯れ』を読んで

鍛田 吉豊

「この南九州の熊本市まで、東京から慌ただしく帰省してきた左翼作家鷺尾和吉は、三日も経つともうすっかり苛々していた―」

この冒頭の一文がこの作品のトーンをすべて言い表している。

自己同一性の危機（アイデンティティ・クライシス）、平たく言えば自分が何であるのか、何であるべきなのか、その答えを探しながら行きつ戻りつ揺れ動く心のありようを、そのままなんの術いもなく書き留めてある。作中の主人公はほぼ作者徳永直の等身大に見

えるが、それでも鷺尾和吉という名前を敢えて使っているのは、作品を書きながら自らがいま置かれている立ち位置を、一步距離を置いて眺める視点を獲得したかったからではないか。

不安、焦り、迷い、苛立ち―作者と等身大の主人公の内面の懊悩、その心の軌跡が、あまりにも無造作に読者の目の前にそのまま投げ出されている。おそらく意図したものとは思えないがその捨て身のあざやかさが、読む側に、主人公の心の襞を細かくたどらせ、いつの間にか負の情緒まで含めて主人公の心のありように、気持ちをおぼえず寄り添わせてしまう、そんな効果を生み出しているように思われる。

この『冬枯れ』は、権力の一斉弾圧の前に立ち竦んで戦線離脱したその言い訳を縷々書き連ねた、いわゆる「転向文学」の代表例として従来から位置づけられてきた。この場合の「転向」というのは、前衛党からの距離を評価の唯一の尺度としている。

もちろん、作品の書かれた当時の時代状況の中で、作品の意味や作者の意図を理解しようとするのが王道であることは論を俟たない。また、作者自身、前衛党との関わり方に自己の文学的存在理由を見出していたことも間違いない。

しかし、作品の発表からすでに八十年が経過している。ここで、敢えて当時の時代状況、社会背景の文脈から抜き出して、純粋な言語空間として作品そのもの持つ価値に着目してみることも可能なのではないだろうか。そういう意味で、表現のリアリティを十分に具えた、独自の文学的価値を持った作品と考えることができるのではないだろうか。

作品中で、主人公鷺尾は郷里での弟たちの存在をとおして、草の根の大衆が本来持っているたくましさ、しなやかさを再発見する。そして、作品中で明示されているとは必ずしも言い切れないが、みずからの出自にあらためて思いをいたすことによって、主人公は、アイデンティティ・クライシスからの脱出のかすかな手がかりを得たように、私には思われる。

表題の「冬枯れ」は、低く垂れ込めた鉛色の空の下、空つ風の吹きすさぶ枯れ野の、主人公の目の前の寒々しい風景であると同時に、作者自身の内面の心象風景でもあり、また息が詰まるほどに重苦しい当時の暗い時代の象徴でもあるだろう。

作者徳永直に『冬枯れ』に描かれているような内面的挫折を余儀なくさせた旧憲法・治安維持法下の暗黒の時代状況は、はるか遠い昔、歴史の向こうに消え去ってしまったものと思っていた。しかし、特定秘密情報保護法、集団的自衛権、憲法改悪……八十年前のあの悪夢の時代状況が再び蘇りつつあるのではないか、わたしたちは歴史の大きな分岐点に今さしかかっている、そのことを自覚する必要があるだろう。

(文芸同人誌「ペレそっそ」主宰)

宮城訪問記

鈴木 之夫

日本は広いようで狭いとはよく言ったもので、最近二度実感する



直が疎開した高橋家

こととなった。一つは父の郷里登米と徳永直、もう一つは気仙沼市立階上（はしかみ）小学校との縁である。

父は宮城県の登米町（現登米市）寺池荒町出身で、実家は農具を扱う鍛冶屋を営んでいた。旧制佐沼中学（現佐沼高校）を卒業した後、昭和十三年に満州に渡り、満州国交通部の技師として働いていた

が、終戦により昭和二十二年七月に実家に引揚げ。登米に疎開していた徳永直は二十年十一月に帰京しているので、父との接点はなかったと思う。作品『妻よねむれ』に「しかし不思議なご縁だべつちやな。九州の方と東北の方とが結婚して、こんなところへ疎開してござるとはや」



高橋家の離れの養蚕室

というくだりがある。我が家はその逆で、昭和二十三年に父が結核を患ったため、一家で東北から母の実家のある熊本にきた。二歳になつていた私はわずか一年間で登米を離れたことになる。

昨年二月に行われた「孟宗忌」の懇親会に出席したとき、宮城県から金野文彦氏（佐藤三千夫記念会事務局長）が参加されており、徳永直の妻となる佐藤トシヲが父と同じ郷里であることを初めて知った。不勉強を恥じ入るしかないが、その出合いが今年の宮城行きのみきっかけとなった。今野さんから「登米に来られるなら徳永直縁の地をご案内します」とお誘いを受けたのである。

二月二三日、午前十一時にまだ雪が残る登米総合庁舎で待ち合わせ。今野さんの車に乗せてもらい、最初に登米の中心地に近い寺池荒町にある父の実家に行ってみた。登米に入る前、石巻の従姉妹から話は聞いてきたが、登米の実家は誰も住んでいないせいか想像以上に荒れ果てていた。

そこから南西に約三キロ、東針田にある徳永直が疎開した高橋様のお宅を訪ねた。親子三人が住んだという離れの養蚕室だったとこ



高橋家の離れの養蚕室

ろは、白壁が少し剥がれ落ちているが躯体はしっかりしており、倉庫として現在も使用されていた。現当主は登米市の消防署に勤務されており、「荒町の鈴木さんのお宅は知っています。ただ、危険ではないかと近所から苦情がきています…」と笑いながら話して下さった。

佐藤三千夫の碑のある小高い丘にも行った。平和を願う宮城県内外の人々が登米の町を見下ろす丘に記念碑を建て、毎年記念行事「呑牛忌」を行っているとのことである。その後、佐藤三千夫の墓碑のある本覚寺など、狭い登米の町をぐるぐる回りながら案内を受けた。周辺町村との合併により、町にあった行政機能が佐沼に移り寂しくなった登米ではあるが、長い目で見れば都市開発の波に飲み込まれることなく、古都としての情緒を持ち続けることができよう気がした。「そつとしておいて」と思いながら、もう一つの目的地気仙沼に向かった。

気仙沼には東日本大震災で家を無くした叔母がおり、現在も仮設住宅で暮らしている。縁というのは東日本大震災のあと、



佐藤三千夫記念碑

偶然であるが私が校区自治協議会会長を務めている熊本市立帯山西小学校が、被災した気仙沼市の階上（はしかみ）小学校に図書を送るなどの支援を続けており、

現在では学校間交流に発展していることである。帯山西小学校には階上小コーナーが設けられ、上級生を中心にチームを組んで熱心に活動を行っている。単発の支援で終わっていないこと

が素晴らしい、新聞で報道されたりもした。翌日小学校を訪問した時、叔母が気仙沼で被災したことは事前に伝えていたのでご存じだったが、その家が学校の近くだったことにびっくりされていた。この縁を大切にして今後も息長く交流を続けていきたいと思ってる。

今回の旅行には後日談がある。石巻の従姉妹から電話があり『之夫さんが撮った登米の写真を見せてもらったけど、あそこまで荒れ果ててはいません。たぶん他人のお家です』とのこと。とすると今野さんと二人してどなたのお宅に上がり込んだのだろうか。

（写真提供：熊本第一信用金庫元常務理事 鈴木之夫氏）



気仙沼の復興現場

二〇一四（平成二六）年度総会報告

- 1 期日：二〇一四年五月二十四日（土）午後二時四〇分
- 2 場所：崇城大学市民ホール小会議室（熊本市中心区桜町）
- 3 読書会：午後二時四〇分～四時（八〇分）
「徳永直の転向問題」作品『冬枯れ』について」
- 4 総会：午後四時～午後五時（六〇分）

（1）会長挨拶 高木陽助

（2）二〇一三年度 事業報告

四月六日（土） 総会についての打合せ

五月六日（月） 総会の準備についての打合せ

六月十五日（土）

二〇一三（平成二五）年度徳永直の会総会

崇城大学市民ホール小会議室

映画鑑賞 DVD『ひとりっ子』

五十年ぶりにOBが自主上演

議題 二〇一二年度事業報告、会計報告

二〇一三年度事業計画、予算案、役員案等

懇親会 「儼華」にて

七月二十九日（月）神田香織「チエルノブイリの祈り」支援

六月～八月 徳永直の会会報62号編集・作成・発行

十月三日（木）「杉野健一さんを偲ぶ会」について打合せ

十一月三日（日）黒髪界隈の徳永直を尋ねて

十一月十一日（月）「杉野健一さんを偲ぶ会」

ガーデンパーティ

熊本民主文学と共催(二名参加)

a 黙禱、献酒、献花

b 杉野健一さんを偲ぶ

梶原氏、中村氏、千葉氏

杉野健一さんの詩の朗読他

会食

十一月〜一月 第三七回孟宗忌実施案検討並びに

会報63号作成のための編集会議

一月十二日(日)

会報63号完成
孟宗忌の案内とともに送付

二月十五日(土)

第三七回「孟宗忌」
第一部 碑前祭 徳永直文学碑前 午後一時半から

献酒、献花、献花報告等

第二部 朗読 熊本大学くすの木会館

午後二時半から

朗読 『冬枯れ』 熊本朗読研究会

第三部 懇親会

三月二十三日(日) 「中村青史先生の『熊本県民文化賞並

びに』歿死した歌人の肖像―宗不早の生涯』祝賀会」

(3) 二〇一三年度 会計報告・監査報告 (別表)

(4) 二〇一四年度 役員

・会長 高木 陽助(元公立高校教諭)

・事務局長 緒方 宏章(第二高校教諭)

・広報 永田 満徳(元公立高校教諭)

・会計 荒木 恵(天草高校教諭)

・会計監査 田中 耕二(玉名高校教諭)

堀田淳子(上天草高校教諭)

・評議委員 寺澤 孝子(暮らしのわかば会代表)

廣島 正(熊本出版文化会館代表取締役)

鍛田 吉豊(『ぺれそっそ』代表)

梶原 定義

鈴木 之夫(熊本第一信用金庫元常務理事)

中村青史(前会長、元熊本大学教授)

(5) 二〇一四年度 事業計画

四月 総会の準備

五月二十四日(土) 二〇一四(平成二六)年度総会

崇城大学市民ホール小会議室

六月〜七月 会報64号作成・編集会議、発行

七月〜十一月 「読書感想文」募集(別紙)

八月 第一回読書会

九月 第二回読書会

十月三十一日(金) 応募締め切り

十一月 「読書感想文」応募作品選考

十二月 会報65号作成・編集会議

一月中旬 会報65号発行・発送

二月十五日 「第三十八回孟宗忌」

碑前祭・講演・朗読会

三月 整理・諸準備

(6) 二〇一四年度予算案(別表)

(3) 2013年度会計報告

収 入①		支 出②	
繰越金	58,333	事務費	10,500
会費(33人)	66,000	通信費	30,320
利子	24	総会関連費	1,600
寄付	43,000	熊本文化振興会団体会費	20,000
懇親会残金	2,000	HP関連費	2,510
		会報印刷費	31,500
		協賛金(神田香織)	5,000
		孟宗忌関係費	7,014
収入合計	169,357	支出合計	108,444
		残金	60,913

①-②=60,913円(次年度への繰越金)

上記の通り報告いたします。

2014年5月24日

会計 荒木 恵

2013年度監査報告

監査の結果、上記の通り相違ありません。

2014年5月24日

監査 田中 耕二

(6) 2014年度予算

収 入		支 出	
繰越金	60,913	事務費	10,000
会費(35人)	70,000	通信費	30,000
雑収入	17	総会関係費	2,000
		熊本文化振興会団体会費	20,000
		HP関連費	3,000
		会報印刷費	32,000
		孟宗忌関係費	10,000
		予備費	23,930
収入合計	130,930	支出合計	130,930

* 会費は、同封の払込取扱票にて払い込みください。

また、郵便局備え付けの払込取扱票にても払込可能です。

* 会費の「ゆうちょ銀行」への振替先

口座記号番号：01710-9-121371 加入者名：「徳永直の会」

(7) その他

- ① 読書感想文募集について
- ② 「会報64号」発行について
- ③ ホームページの活用について
- ④ 「くまもと文化振興会」報告
- ⑤ 会員募集について
- ⑥ その他

徳永直文学散歩⑨

緒方 宏章

「冬枯れ」

四

…白い埃の渦がしだいに遠のき、だいぶおくれて、指揮官らしい三四人の…が、しずかに馬の上で揺れながら、笑い声をひびかして通り過ぎると、いままで軒先や、道傍に避けていた荷馬車や、百姓達がホッとしようにうごき出した。

「あれは何だい？」

うしろの団子焼きの釜の上から首を出している妹に、鷲尾は訊いた。リヤカーに白米を積んだのや、天秤でつっかけた笹に、味噌とか野菜とかを入れた百姓女達、中には赤いネルの腰巻きをたらしただ娘なぞも雑じって、毎朝のように群をなして通る。

「ありやああた、町イ売りい出らすとたい。このごろはどうして、

よか百姓でん現金無か
とだもん……」

よか百姓でない貧農の女房たちは、売る物もないせいか、ヨイトマケなどに働きにゆく群が、夕方などは鷲尾の家の軒先に、泣き声を囁らした脊の赤ん坊を揺すぶり揺すぶり近寄ってきて、赤銭の一枚か二枚かで団子を買って赤ん坊を黙らせ、暗くなつた県道筋を帰ってゆくのだった。

県道筋に沿うた土堤上を、鷲尾の末弟たちが勤めている郊外電車が、一時間おき位に通つた。塗の剥けた赫ちやけた電車はグラグラ揺れながら、いつも空らツぽであつた。鷲尾が軒先にいると、車掌台からまるくて寒さで赤らんだ弟の顔がツン出て、オーイと叫びながら弁当箱のあいたのを、道傍へ抛り出してゆくことがあつた。

そして空らツぽの電車をやりすごし、やりすごし、赤錆びた枕木の上を百姓達が歩いてきた。草鞋ばきの古トンビや、市の学校へゆく学生や、大きな風呂敷を背負つた行人たちや、そんなのがウルさそうに電車を見送つてはあゝいていた。……

(「徳永直文学選集」より)



鷲尾が帰熊した時の家の近所と熊本電鉄

熊本の市街地も、立(龍)田山の麓を遙かに越え大きく広がっている。今では、『馬』に登場する植木も市町村合併で熊本市北区の一部となっている。

写真右手方向に熊本市中心部があり、左手方向は植木・菊池へと繋がる。正面のビルの向こう側は、立田山へと続いている。また、手前後ろには、坪井川が流れている。

「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。また、徳永直に関する書物・研究・記事等の紹介も行っています。「徳永直の会」で検索してください。アクセス数が、累計一八〇〇回を超えました。

新規会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

住所変更等の連絡のお願い

住所変更等がありましたら、左記までご連絡ください。

〒 862-0935 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

第三十七回「孟宗忌」の様子

碑前祭 平成二十五年二月十五日(土) 午後一時半より



「碑前祭」の様子



中村青史先生による『冬枯れ』の解説

孟宗忌 熊本大学くすの木会館にて
 *『冬枯れ』の解説 午後二時半より



『冬枯れ』の朗読風景2



『冬枯れ』の朗読風景1

*熊本朗読研究会の皆様による『冬枯れ』の朗読



懇親会の様子

*懇親会



『冬枯れ』の朗読風景3